

愛想笑いと心理的ストレス反応の関連

—就職活動の面接時に着目して—

問題と目的

近年、就職活動の早期化・長期化により、大学生が面接場面で強い心理的ストレスを経験する機会が増加していると考えられる。面接では本音を抑え、相手や状況に配慮した応答が求められることが多く、その一つとして快感情を伴わない意図的な笑顔、いわゆる「愛想笑い」が用いられることがある。本研究は、就職活動中の面接場面において、答えにくい質問を受けた際に生じる愛想笑いと心理的ストレス反応との関連を明らかにすることを目的とした。加えて、愛想笑いと面接自己効力感、就職活動期間や面接回数などの変数との関連についても探索的に検討した。

方法

就職活動中に面接経験のある大学生・大学院生 156 名(男性：58 名、女性 93 名、性別無回答 5 名、平均年齢 21.74 歳、 $SD = 1.00$)を対象に、Google Forms を用いた質問紙調査を実施した。調査内容は、(1)就職活動状況(期間・面接回数等)、(2)面接官からの答えにくい質問への反応(愛想笑いの頻度を含む自作項目)、(3)面接自己効力感尺度、(4)心理的ストレス反応尺度で構成された。

結果と考察

分析の結果、面接で答えにくい質問を受ける頻度が高いほど、愛想笑いの頻度および心理的ストレス反応が高いことが示された。また、愛想笑いの頻度と心理的ストレス反応の間には有意な正の相関が認められた。さらに、心理的ストレス反応が高いほど面接自己効力感は低く、愛想笑いとは面接自己効力感の関連はストレス反応を統制すると有意ではなくなった。探索的分析では、就職活動が最近終了した者ほど心理的ストレス反応が高く、面接自己効力感が低い傾向が示された一方、就職活動期間や面接回数は、答えにくい質問を受ける頻度とは関連するものの、愛想笑いや心理的ストレス反応との直接的な関連は明確ではなかった。以上より、面接場面における愛想笑いは対人適応行動である一方、心理的ストレスの蓄積と関連する可能性があり、就職活動支援では内面的な心理的負担への配慮が重要であると考えられる。

就職活動の面接場面における“あがり”経験と主観的成功感

—セルフ・コンパッションの役割に着目して—

問題と目的

就職活動における面接は、今後の人生に大きな影響を与えうる重要な社会的場面である。しかし、多くの人が面接時に“あがり”を経験し、それがパフォーマンスの低下や成功感の減少を招いている。本研究では、自己への受容的態度であるセルフ・コンパッションに着目し、セルフ・コンパッションが“あがり”の負の影響を緩和すると予測した。セルフ・コンパッションが“あがり”を媒介し、面接の主観的成功感に影響を与えるかどうかを検討した。

方法

就職活動の面接を経験したことがある大学生を対象に、Google Forms を用いて質問紙調査を実施し、21歳から28歳までの128名（男性42名、女性79名、その他2名、無回答5名、平均年齢21.63歳、 $SD=0.91$ ）から有効な回答が得られた。質問紙は、(1)フェイスシート、(2)経験した面接の詳細を尋ねる項目、(3)面接に対する事前のイメージトレーニングの実施度、(4)面接における“あがり”の程度、(5)面接に対する主観的成功感、(6)面接の結果、(7)セルフ・コンパッションの高さで構成された。

結果と考察

分析の結果、面接時の“あがり”の程度が高いほど、面接の主観的成功感が低いということ、セルフ・コンパッションが高い人ほど“あがり”の一因子である自己不全感と他者への意識が弱いことが明らかになった。さらに、セルフ・コンパッションが高いほど、自己不全感が弱く、それにより面接の主観的成功感が高いことが明らかになった。この結果から、従来のような“あがり”の発生自体を抑制する対処法ではなく、“あがり”発生後の負の影響を緩和するような予防的な方略を提示できる可能性を見出した。面接指導の場面では、“あがり”の発生を前提とし、その後の自己批判的な思考を和らげるための心理的スキルを導入することが効果的であると考えられる。ただし、セルフ・コンパッションが面接場面における“あがり”や主観的成功感に与える因果的な影響については、今後検討の余地がある。

大学生の LINE でのやりとりにおいて生じる不快感と愛着スタイルの関連

—対人コミュニケーションにおける既読機能の役割に着目して—

問題と目的

LINE は日常的なコミュニケーション手段として広く利用されているが、既読機能によってメッセージが読まれたことが可視化されることで、既読無視という従来とは異なる不快感が生じている。本研究では、幼少期の養育者との関係から形成される愛着スタイルに着目し、LINE でのやりとりにおいて生じる既読無視への不快感が、愛着スタイルおよび相手との関係性によってどのように規定されるかを明らかにすることを目的とした。

方法

大学生を対象に Google Forms による質問紙調査を行い、18 歳から 25 歳までの大学生 184 名（男性 54 名、女性 128 名、平均年齢 20.62 歳、 $SD = 1.34$ ）から回答を得た。質問紙は、(1) LINE の利用状況、(2) 既読無視の経験、(3) 既読無視への不快感、(4) 相手との関係性別にみた既読無視への不快感、(5) 既読無視に対する対応行動、(6) 未読無視の経験と行動、(7) LINE の利用に関する意識、(8) 愛着スタイル、(9) 人生満足度、(10) 友人関係満足度で構成された。

結果と考察

分析の結果、愛着不安が高いほど既読無視への不快感は高く、愛着回避が高いほど不快感は低いことが示された。また、恋人や親密な関係になりたい相手といった関係性においては、親しい友人や知人と比較して、既読無視への不快感が高い傾向が認められた。愛着不安と愛着回避の交互作用が確認され、特に親しい友人との関係において、愛着不安が高く愛着回避が高い人が最も不快感を抱くことが示された。対応行動に関しては、愛着不安が高い人ほど LINE を何度も確認するなどの確認行動をとる傾向がみられた一方で、愛着回避が高い人は積極的な対応行動をとらない傾向がみられた。本研究の結果から、既読無視への反応は、対人関係における不安や相手との距離の取り方と結びついていることが示された。既読無視という LINE のやりとりにおける些細な出来事に対する不快感や対応行動は、個人の愛着スタイルや相手との関係性によって異なることが示され、現代の青年期における対人関係理解に新たな視点を提供したといえるだろう。

親がもつ養育態度が子どもの挫折観に与える影響の検討

—親がもつ挫折の捉え方に着目して—

問題と目的

人生の中で挫折は個人にとって、自己概念を明確化させたり、新しい知見や価値観をもったりするために非常に大切なことである。しかしながら、挫折は時として心理的脅威となり個人の成長を妨げ、環境への適応やその後の人生に負の影響を残すこともある。これらの違いとして本研究では「挫折に関する価値観」に着目し、子どもの挫折に関する価値観には親の「養育態度」が大きな影響を与えていると考えた。そこで「親の挫折に関する価値観」は「親の養育態度」を媒介し「子どもの挫折に関する価値観」に影響を与えているモデルを想定し、これらの関係性を検討した。

方法

Google Forms を用いて質問紙調査を実施した。17歳から33歳までの130名(男性:39名, 女性:88名, 性別未回答3名)から回答が得られたが、明らかに回答を辞退したと考えられる3名のデータを除いて検討することとした。その結果17歳から33歳までの127名(男性:38名, 女性:88名, 性別未回答:1名)が分析の対象となった。質問紙は(1)実際に経験した挫折に関する質問, (2)子どもと親それぞれの挫折に関する価値観を測定する質問, (3)親の養育態度を測定する質問, で構成された。

結果と考察

分析の結果、子どもと親の挫折に関する価値観尺度はそれぞれ2因子、親の養育態度尺度は3因子構造が想定された。子どもの挫折に関する価値観下位尺度を独立変数、親の養育態度下位尺度を媒介変数、親の挫折に関する価値観下位尺度を従属変数として各因子ごとを想定した重回帰分析の結果、「子どものレジリエンス志向的挫折観」、「親の感情的・強制的養育態度」、「親のレジリエンス志向的挫折観」を投入したモデルにおいてのみ直接効果、媒介効果が共に見られた。一方、全下位尺度を投入した並列媒介共分散構造分析の結果、どのモデルにおいても媒介効果は見られず、子どもの挫折への価値観は親の挫折への価値観からの直接効果が強い結果であった。これらの違いから、価値観の伝播は養育態度のような単一の要因のみを想定して語る事はできないことを示唆した。

メタバースでのアバター体験が使用者に与える影響

ー経験者による主観的変化の検討ー

問題と目的

近年、インターネット上の仮想空間で自身の代わりに活動するキャラクター(アバター)を作成し操作する「メタバース」は多様なものとなり、様々な応用がなされている。アバターは使用者と外見や性別などが異なる場合も多く、使用中にはその外見によって行動の変化が生じると明らかになっている (Yee & Bailenson, 2007)。本研究ではアバターを使用したメタバースでの活動によってアバター使用中だけでなくメタバース利用後にも自己の変容が生じていると予測し、メタバース利用経験者の主観的変化を検討した。また、メタバースでアバターを用いた体験が、使用後の行動レパトリーと考え方のそれぞれにどのような影響を与えうるのか、あるいは与えないのかについても検討を行った。

方法

メタバース利用経験者を対象に質問紙調査を実施し、52名(男性:25名、女性:26名、無回答:1名、平均年齢:29.88歳、 $SD=11.08$)から回答が得られた。質問項目は、(1)スクリーニング項目、(2)フェイスシート、(3)メタバースの利用経験に関する項目、(4)使用したアバターに関する項目、(5)メタバース利用中に関する項目、(6)メタバースでの体験による影響に関する項目、(7)今後に関する項目で構成された。

結果と考察

分析の結果、利用者はメタバースの影響をあまり自覚していないことが明らかになった。一方で、自覚されるネガティブな影響はほとんどないことや、特定の体験が日常生活への影響と関連していることも示された。メタバースでの創造的な体験やポジティブ感情を伴う体験は日常生活での活動の拡大と関連し、メタバースでの社会的な体験は日常生活の社交性の拡大を予測した。また、創造性・表現に関する体験とメタバースでのポジティブな感情は知識・価値観と関連し、社交性に関する体験と創造性・表現に関する体験は自己理解への影響を予測した。これらの結果から、特定の体験を豊かに経験した人においては行動や考え方に変化が生じると示唆された。つまり、メタバース利用後の影響には個人差があり、メタバースにおいて何をどのように体験したかが重要であるといえるだろう。

疎外感とアレキシサイミアの関連性

—SNS 利用に着目して—

問題と目的

近年、ソーシャル・ネットワーキング・サービス (SNS) が著しく普及し、これにより従来のコミュニケーションが部分的に SNS に移行している。言語化が必要となる SNS 上でのコミュニケーションにおいて、アレキシサイミアに特有の自身の感情の識別や感情の言語化に困難さは、アレキシサイミア傾向を持つ大学生の対人関係の課題に関与していると考えられる。大学生の時期にあたる青年期に重要となる対人疎外感に焦点を当て、アレキシサイミアと対人疎外感、SNS 利用の視点から検討を行った。

方法

大学生を対象に Google Forms を用いて質問紙調査を実施し、大学生 129 名 (男性 44 名, 女性 81 名, その他 4 名, 平均年齢 21.83 歳, $SD = .77$) から回答が得られた。質問紙は、(1) フェイスシート、(2) アレキシサイミア尺度、(3) 対面での対人疎外感尺度、(4) SNS 利用状況、(5) SNS 使用態度尺度、(6) SNS 上での対人疎外感尺度で構成された。

結果と考察

分析の結果、次の 3 つのことが示された。第一に、アレキシサイミアは対人疎外感と SNS 使用態度との間に有意な正の相関が認められた。第二に、アレキシサイミアの高低と対面対人疎外感、SNS 対人疎外感の関連を検討した結果、アレキシサイミア高群は低群よりも対人疎外感が高いことが明らかになった。また、対面条件と SNS 条件の間で対人疎外感に差が認められた。一方、アレキシサイミア群と条件の交互作用は有意ではなかった。第三に、対面条件と SNS 条件の両方で、アレキシサイミアが対人疎外感を介して問題的使用に影響を及ぼす間接効果が認められた。また、対面条件での対人疎外感の方が SNS 条件での対人疎外感よりもアレキシサイミアとの強い相関が見られたり、対面での対人疎外感の方が間接効果が高いことも認められた。これらの結果より、アレキシサイミア傾向の高い人は、対面での対人疎外感を感じることで、対面での人間関係が上手くいかないからこそ、相手の監視や対面よりも深い関わりを求めて SNS の問題的使用を強める可能性が示唆された。

「歩きエスカレーター」と共感性の関連

—条例制定前後の変化に着目して—

問題と目的

エスカレーターを利用するにあたって、立ち止まらず歩く習慣や片側を空けて歩く人に配慮する習慣が根付いてきた。これらの乗り方に起因するエスカレーター上での事故の多発を受けて埼玉県や名古屋市ではエスカレーターにおいて立ち止まることを求める条例を制定した。

本研究では、エスカレーターを歩く習慣と歩くべきではないという新たな規範の混在する状況下における人々のエスカレーター利用に関する意識について、社会的迷惑行為と関連があるとされる対象者別の共感性との関係や条例制定以前との比較について検討を行った。

方法

2025年11月14日から2025年11月24日にかけて Google Forms を用いた質問紙調査を行った。18歳から79歳までの102名（男性：51名，女性：51名，平均年齢：36.77歳， $SD = 17.09$ ）から回答を得られた。質問紙は（1）フェイスシート，（2）エスカレーターの利用状況に関する項目，（3）エスカレーター利用時の意識に関する項目，（4）片側空けに関する項目，（5）条例に関する項目，（6）対象者別共感性尺度で構成された。

結果と考察

分析の結果、「条例制定以前に歩かないよう意識していたか」、「現在名古屋市で歩かないよう意識しているか」、「現在名古屋市以外で歩かないよう意識しているか」の3項目について有意差がみられた。

共感性と現在の名古屋市において「エスカレーターにおいて歩かないよう意識しているか」の項目については一般的共感，関係性の希薄な人への共感，親しい人への共感のいずれも関連がみられなかった。

これらの結果から、条例制定によって人々の意識に変化が起きているものの、エスカレーターを歩くことを社会的迷惑行為とみなされる段階には至っていないのではないかと考えられた。

大学生の対人葛藤方略の使用と使用動機および精神的健康との関連

—友人グループにおける対人葛藤場面のシナリオを用いた検討—

問題と目的

現代青年の友人関係の特徴として、傷つくのを恐れて内面の開示を避ける表面的な関係が指摘されており、その結果、精神的健康に悪影響を及ぼすことが報告されている。このような関係の中では他者との対立を避けることが優先されるだろう。しかし、必ずしも他者との対立を避け、同調することが悪いことであるというわけではない。他者との対立場面において、どのような考えからどのような行動を取るかということが重要であると考えられる。そこで本研究では、大学生の対人葛藤方略の使用とその動機および精神的健康との関連性について検討することを目的とした。具体的には、複数の友人と自分とで意見が対立しているという対人葛藤場面を用いて検討した。また、友人たちとの親密度および葛藤の程度を操作し、それらによる違いについても検討した。

方法

大学生を対象に、Google Formsにてシナリオを用いた質問紙調査を実施し、124名（男性：29名，女性：93名，性別未回答者：2名，平均年齢：21.33歳， $SD = 1.03$ ）から有効な回答が得られた。質問紙は、(1)フェイスシート，(2)対人葛藤方略スタイル尺度（HICI），(3)葛藤解決における目標，(4)心理的ストレス反応尺度（SRS-18）で構成された。

結果と考察

分析の結果、方略の使用に関しては、「回避」および「統合」が使用されやすく、「強制」および「相互妥協（収束）」が使用されにくいことが示された。親密度と葛藤の程度が方略使用に与える影響は、多くの方略において有意な主効果や交互作用は認められなかった。この結果より、方略使用に関して条件による影響はほぼ見られず、個人差による影響が大きいたことが示唆された。また、方略の使用は、方略使用の際の動機による影響を受けることが示された。特に、「統合」は関係を深めようとする動機と結びついており、建設的な葛藤解決を志向する方略であることが示された。加えて、「統合」、「強制」、「自己譲歩」においてストレス反応との間に有意な関連が認められた。本研究の結果は、現代青年の友人グループ内の葛藤場面における、葛藤対処の特徴を捉える一助となったと考えられる。

SNS 上のフェイクニュースとファクトチェックが 候補者に対する印象および投票意欲に与える影響

問題と目的

近年の SNS の急速な普及に伴い、政治や選挙におけるフェイクニュースの拡散が民主主義を脅かす深刻な社会問題となっている（笹原, 2018）。先行研究ではファクトチェックが誤情報に対する信憑性を低下させることが示されている（Porter & Wood, 2021）が、候補者への印象や投票意欲といった意思決定プロセスへの回復効果、あるいは訂正後も負の影響が残存するか否かについては十分に明らかにされていない。本研究では、候補者の印象を悪化させるフェイクニュースが態度形成に与える影響と、ファクトチェックによる訂正情報の提示がもたらす変化について、仮想のシナリオを用いて検討した。

方法

調査は 2025 年 9 月から 10 月にかけて、17 歳から 78 歳の男女 134 名を対象に Web 上で実施された。実験デザインは、参加者をフェイクニュース訂正条件と真実条件の 2 条件に無作為に割り当てる参加者間計画を用いた。フェイクニュース訂正条件では架空の候補者の虚偽の政策を提示し、その後ファクトチェック機関による訂正情報を提示した。一方、真実条件では最初から候補者の真実の政策を提示し、その後同様の訂正情報を提示した。測定指標として各段階における候補者の印象評価および投票意欲を 5 件法で求めた。

結果と考察

分析の結果、1 回目の測定で、フェイクニュース訂正条件の印象評価・投票意欲は真実条件よりも有意に低く、否定的なフェイクニュースが態度を悪化させることが確認された。次に訂正情報提示後の変化を検討したところ、フェイクニュース訂正条件では印象評価・投票意欲ともに有意に上昇し、ファクトチェックが高い訂正効果を持つことが示された。特筆すべきは、訂正後の評価が真実条件と同等、あるいは印象評価においては真実条件を上回る過剰回復の傾向を示した点である。一方で探索的分析の結果、ファクトチェックによる訂正効果は一様ではなく年齢や政策に対する事前賛否といった個人特性によってその程度が規定されることが示唆された。総じて、本研究は、SNS におけるファクトチェックが有権者の態度を再構成する強力な介入手段となり得ることを実証的に示された。

大学生におけるサイコパシー傾向の検討 —リーダーシップ行動と集団適応感に注目して—

問題と目的

サイコパシーは一般的に反社会的なパーソナリティとされるが、その表面的な魅力や他者操作といった特徴は、組織のリーダーとしての適性に結びつく可能性も指摘されてきた (e.g., Bart et al., 2012)。しかし、サイコパシー傾向の高いリーダーが集団に受け入れられるかどうかは明らかではない。そこで本研究では、大学生における「サイコパシー傾向」「リーダーシップ行動」「集団適応感」の関連について検討することを目的とした。その際、本人の主観のみならず、対他者評価というメンバーからの視点を含めた双方から検討することで、より多角的な理解を目指した。

方法

大学生を対象に Google Forms による質問紙調査を実施し、不備のあるデータを除いた 191 名 (男性 : 49 名, 女性 : 138 名, 無回答 : 14 名) を分析の対象とした。質問項目は、(1) フェイスシート、(2) リーダーシップ行動尺度、(3) リーダー経験の有無、(4) 集団とリーダーになった動機について、(5) 集団適応感尺度とサイコパシー尺度、(6) 他者に対する評価、(7) 集団への感じ方と考え方について、(8) 他者に対する評価で構成された。なお、(3) でリーダー経験があると答えた者は (4) ~ (6)、ないと答えた者は (7) ~ (8) を回答するようセクションを分けた。

結果と考察

分析の結果、第一に、対他者評価において、リーダーの二次性サイコパシーは、計画性や関係配慮等のリーダーシップ行動の質を低下させ、集団適応感を著しく損なうことが明らかになった。これにより、二次性サイコパシーの負の影響は、具体的な行動の欠如を介して生じることが確認された。第二に、自己評価ではサイコパシー傾向と適応感に関連が見られなかった一方、両者の差分である「相対的適応感」の分析では、リーダーの二次性サイコパシーが高いほど、メンバーはリーダーを低く評価して相対的に自身を高く評価する傾向が示された。

以上より、二次性サイコパシーの高いリーダーは、単に行動面で集団適応に失敗しているだけでなく、心理面でも優越感の対象となっている実態が明らかとなった。今後のリーダーシップ教育においては、360 度評価等を用いてこの「評価の乖離」と「信頼の喪失」を客観視させ、メンバーとの関係再構築を促す介入が有効である可能性が示唆された。

さらに、一次性サイコパシーは、一部の積極的なリーダーシップ行動や個人的利益を追求する動機とは正の関連も見られたが、二次性サイコパシーほど広範な負の影響は見られなかった。これらの知見は、サイコパシー傾向を一面的に捉えることの危険性を示し、若年層におけるリーダーシップ研究およびパーソナリティ研究において、多角的評価とサイコパシーの下位側面に注目することの重要性を改めて示すものであった。

自由討論場面における消極的表面的同調が発言抑制に与える影響

—意見収束状況のシナリオを用いた探索的検討—

問題と目的

集団内で自由な話し合いが求められている場面であっても、自分の意見を発することが難しい場合がある。従来は周りの意見を自分の意見のように発言するという現象が表面的同調として扱われてきた (e. g., Sherif, 1935 ; 藤原, 2006) が、周囲の目を気にして自分の意見が言えないという点では、発言抑制も表面的同調と同じメカニズムで説明できると考える。そこで、本研究では発言を伴わない表面的同調を「消極的表面的同調」と定義し、現象の発生プロセスを探った。集団の意見が一つに収束しているかどうかを操作したシナリオを用いて、意見が収束しているという認識と消極的表面的同調の関連を検討した。

方法

Google Forms を用いて質問紙調査を実施した。17 歳から 25 歳までの 138 名 (男性 37 名, 女性 97 名, 無回答 4 名 ; 平均年齢 : 21.49 歳, $SD = 1.38$) から回答を得た。そのうち、自由討論場面のみを記載した統制シナリオの回答者は 72 名、自由討論場面において集団の意見が収束していることを記載した意見収束シナリオの回答者は 66 名であった。質問紙は、(1) フェイスシート, (2) 自由討論尺度, (3) 収束認識尺度, (4) 消極的表面的同調, (5) 操作確認, (6) グループ討論経験の有無, (7) 被受容感尺度, (8) 特性的同調で構成された。

結果と考察

媒介分析の結果、シナリオの違いから消極的表面的同調へは有意な直接効果が見られなかった。ただし、シナリオの違いから収束認識には有意傾向で影響が見られ、収束認識から消極的表面的同調へは有意な影響が認められた。「集団における意見収束の強さが消極的表面的同調に与える影響は、意見収束の認識によって媒介される」という仮説が支持されなかった理由として、シナリオの条件操作が十分に影響を与えなかった可能性が考えられる。一方で、意見収束の認識と消極的表面的同調の間に有意な関連が見られたことは、発言抑制が表面的同調のメカニズムで説明できる可能性を示唆している。今後は意見収束のシナリオ操作を明確にすることや、個人差要因を考慮することで、現象の発生プロセスをより詳細に検討することが求められる。

会話型 AI が集団意思決定に与える影響

—共有情報バイアスの克服における AI 介入役割の検討—

問題と目的

集団討議では、全員が知っている共有情報が中心となり、一部の参加者のみが持つ非共有情報が十分に扱われない共有情報バイアスが生じやすいことが指摘されている

(Stasser & Titus, 1985)。このような状況では、討議の過程で利用される情報が偏り、結果として十分な検討が行われないうまま意思決定がなされる可能性がある。近年、討議支援手段として会話型 AI の活用が注目されているが、その介入方法が情報の扱われ方や意思決定に与える影響は十分に検討されていない。本研究は、会話型 AI の介入スタイルの違い（構造化チェック型 vs 悪魔の代弁者型）が、集団討議における非共有情報の処理および意思決定に与える影響を検討することを目的とした。

方法

大学生および大学院生 140 名を対象に、Google Forms にてゼミ新メンバー選考を題材としたシナリオを用いた質問紙調査を実施した。不備のあるデータを除外した結果、有効回答は 137 名（男性 42 名、女性 96 名、性別未回答 2 名、平均年齢 21.15 歳、 $SD = 1.22$ ）となった。質問紙は、(1) フェイスシート、(2) シナリオおよび AI 発言の認識に関する項目、(3) 会議で次に発言しようと考えている内容に関する自由記述、(4) AI に対する信頼態度、(5) 最終的な候補者選択による意思決定結果を測定する項目で構成された。

結果と考察

分析の結果、非共有情報得点（非共有情報に言及した程度）には条件間で差が認められ、構造化チェック型 AI は悪魔の代弁者型 AI よりも高い値を示した。一方、AI 介入の有無による明確な差や、最終的な候補者選択における有意な違いは確認されなかった。

これらの結果から、AI 介入は意思決定結果を直接改善するものではないが、介入スタイルによって討議中の情報処理過程に影響を及ぼす可能性が示唆された。特に、構造化チェック型 AI は論点を整理することで発言の心理的負担を下げ、非共有情報を提示しやすい状況を生み出したと考えられる。一方、悪魔の代弁者型 AI は批判的な介入が発言の抑制につながった可能性がある。本研究は、AI による介入が人の意思決定を直接変えなくとも、討議の進め方や情報の扱われ方に影響を与えうることを示し、今後の AI を用いた意思決定支援や、人と AI の協働のあり方の一つを提示したといえるだろう。

大学生の進路選択場面における行動の自己評価と進路選択への満足度

—マキシマイゼーションと自己意識に着目して—

問題と目的

人は生活する上で常に選択を迫られている。大卒時の進路選択は基本的に人生で1回しかないからこそ後悔は低く、満足度は高い方が良いが、進路について考えるほど、より良い条件や上を求めたり周りの目を気にしたりして迷い悩んでしまうこともあるだろう。そこで本研究では情報社会の現代を生きる大学生の進路選択について、意思決定スタイルとの関連性や自己意識との関連性を広く検討することを目的とした。マキシマイゼーション（利益最大化傾向、全ての選択肢の中からベストの選択を追求する志向）と公的自己意識が高いほど、進路選択に向けた行動の自己評価や意思決定における満足度が低くなると考え、検討を行った。なお本研究では進路選択を就職に限らず広く対象とすることを試みた。

方法

Google Form を用いて質問紙調査を実施し、大学4年生141名（男性34名、女性103名、性別未回答4名、平均年齢21.69歳、 $SD = 0.60$ ）から回答が得られた。質問紙は、(1)フェイスシート、(2)大学卒業後の進路に関する項目、(3)大学生活に関する項目、(4)マキシマイゼーション、(5)自己意識尺度、(6)進路選択をどう捉えているかに関する項目、以上で構成された。

結果と考察

分析の結果、マキシマイゼーション・公的自己意識と進路選択の意思決定における満足度との間に相関が見られず仮説は支持されなかったが、私的自己意識が高いほど意思決定における満足度も高くなることが示された。この結果から、マキシマイゼーションそのものは人生満足度や主観的幸福感と同じように、進路選択の意思決定における満足度においても直接的な関連性は示唆されず、他との複合要因の上で関連すると考えられる。加えて、私的自己意識が公的自己意識と満足度項目・今後の捉え方項目との関係を調整する要因であることが有意傾向ながらも示唆された。さらに大学卒業後の進路に関する項目や大学生活に関する項目との相関にも着目した結果、進路選択における選択肢との関連は一部見られたことが示された。